

シンポジウム・ワークショップ

日本版C A B E を考える

横浜市開港記念会館

11月29日(木)9:30~12:00

建築やまちづくりにおいて地域固有の特性を捉える事は大切であり、景観法や地区計画などにおいても、定性的な判断が求められるようになってきています。建築や街づくりが文化であるという認識を建築基本法と共に創って行くことが求められ、建築家の役割がより増してきている状況と言えます。日本におけるコミュニティアーキテクトをしっかりとした職能として位置づける意味で英国のCABE(Commission for Architecture & Building Environ-

ment)は参考になります。日本においてCABEが実現するのであれば、どのような形が望ましいのかを明確にし、それに向かってアクションを起こす時期かと思われます。東日本大震災での復興において、建築・街づくりの支援は急務であり、その意味でも、日本版CABEについてディスカッションすることは大切と思われます。この度、JIA 芦原会長のもと、日本版CABE推進タスクフォースWGが設立され、議論を深めると共に、JIA 横浜大会の開かれた場において日本版CABEについて皆で考えるシンポジウムを実施する事になりました。是非、ご参加いただければと思います。



「学び舎」—学ぶことは生きること、生き続ける学び舎—

横浜市開港記念会館

11月29日(木)13:30~16:30

『生きることは学ぶこと〜人は、死ぬまで学び続け、見返りの無い関係としての友達がいる』人は時を積み重ねて人生を過ごす。学び舎の記憶は自分史そのものではないか。学んだ空間は一生その人の心に残り、その人を支えるのだらう。保存とは、心を継承する行為ではないか。復興小学校は、震災で全てを失った人々に、新しい記憶の蓄積を求めて熱誠的に設計された。それゆ

えに多くの素晴らしい建築がのこされたのではないか。3.11の震災からも我々は、人々を育む環境を築いていかねばならない。これからの時代を超えて永く人の心に刻まれるに値する建築を築いていかねばいけない。機能性、効率性優先の時代には、画一化された教育、建築が要求され、結果として地域性がない学校がつけられた。成熟社会、多様化の社会に向けて、かつての『教育理念』、『地域が育てるこども』、『地域性』を表現した『学び舎』建築こそ、残し、学ぶべき時代がきている。すでに失われた「学び舎」を再認識しながら生き続ける「学び舎」とは何かを探って行きたい。



血縁に基づかない新しい住まい方〜シェアハウスの可能性〜

神奈川県民ホール

11月29日(木)13:30~16:30

(主旨) 本大会のテーマである「共に超える」を踏まえ、新たな住まい方に関する課題と方向性を探るための企画とする。「東日本大震災により見直された新たなパラダイム(価値観)に基づき、日本文化の再考が求められている。」と大会テーマの説明文に記載されているとおり、単身世帯が急激に増え、家族という血縁や婚姻にこだわらず、他人同士が集まって住むシェアハウスなどの住まいの形

が注目を浴びている。こうした住まい方の課題と方向性を探るため、講演会を実施する。(内容) 古い公団住宅のリノベーションにより団地型シェアハウスを実現した事例や小規模アパートで共用部が外部空間となる事例を紹介する。(講師) ①りえんと多摩平 株式会社リビタ 常務取締役 森尻 謙一氏 ②ヨコハマアパートメント 有限会社オンデザインパートナーズ 代表 西田 司氏



木材サミット

BankART Studio NYK

11月29日(木)13:30~16:30

主旨: これからの我が国の森林有効活用について知見を広める。内容: 戦後造林された人工林が資源として利用可能な時期を迎える一方、木材価格の下落によりこれらが十分に活用されていないことを鑑み、木材利用を法により促進するため、平成22年に公共建築物等における木材の利用の促進に関する法律が施行された。国内における利活用の知見について神奈川県で活躍されている林業・木

材関係者のお話を聞く。また、今日の環境問題における重要なテーマとして、他国の木材活用の知見も集め、木材の適切な活用について国際的な知見を広める。講師: 杉山精一(南足柄在住・自伐林家) 中谷正人(千葉大学客員教授) 河合博(JA全農かながわ顧問) 山口明宏(県立産業技術短大講師) 青木和壽(長野県環境審議会地球温暖化対策専門委員)



未来に残したい20世紀の建築

BankART Studio NYK

11月30日(金)9:30~12:00

辰野金吾、ル・コルビュジエ、カルロ・スカルパとの対話

大都市ではスクラップアンドビルドが見られますが、人口減少・地球環境・経済低迷の現実、建築家の仕事は新築から再生に移行していく可能性を実感させます。そして、徐々に日本でも再生の事例が増えつつあります。再生にかかわる建築の価値や建築主の意向により、それらの改修の方法は、「保存」「活用を考えた再生」「リフォーム」と多様です。再生に取り組み改修の方針を決定する際に、その建築の位置づけや価値について十分に検証し、先輩にあたる建築家が何を想い図面を描いたのかを理解することが重要です。それはま

さしく、作品を通じて、その建築家との対話にほかなりません。「残せば満点」の時代は終わりつつあります。今回の「未来に残したい20世紀の建築」のシンポジウムでは、建築をどのように後世に引き継いでゆくべきか、事例報告の後にICOMOSのマドリッド文章について山名准教授の解説、そして「インテグリティ(完全性)」を踏まえながら意見交換を予定します。

パネリスト(予定) 東京駅の再生 ジェイアール東日本建築設計事務所 田原幸夫 文化財としてのコルビュジエ作品の再生 東京理科大学准教授 山名善之 イタリアの再生事例 再生部会長 柳沢伸也 ※演題・パネリストは変更の可能性があります

パネリストからの報告の後、パネルディスカッションを行います。モデレーター: 再生部会前部会長 鎌坂徹



カステル・ヴェッキオ美術館

「求められる『住育』」—不具合を見抜く「目」を養う—

BankART Studio NYK

12月1日(土)10:15~12:30

第1部では、求められる『住育』という演題で「住育のすすめ」の著者である日本住育の会会長の竹島靖氏の講演があります。第2部では当建築相談室員が実際に相談を受けた内容(大手ハウスメーカーによる新築住宅が数年もしないうちに地盤沈下により家が大きく傾斜した)について相談者からの報告、相談室員による現場調査の報告、相談者からの依頼を受けた弁護士が現場調査報告書を基にして傾斜した家屋をハウスメーカーの責任で改修して

傾斜を直した過程を発表します。その後、竹島氏、相談者、弁護士、相談室員によるパネルディスカッションで、どのような問題点があった、欠陥住宅が出来てしまったのか、このようなことが起こらないためには、どのように対応すべきであったのかについて住育の観点から議論をし、その後、会場の出席者との質疑応答もふまえて議論を深めたいと考えています。

けんちく体操ワークショップ

BankART Studio NYK

12月1日(土)10:00~12:00

けんちく体操は万人が建築に親しむユニークな方法である。建物の写真をプロジェクターで大きく映し出す。参加者はそれを観察して、即座に自分の身体でその形のマネをする。それは建物全体でもいいし、部分でもいい。だれだって、建物の細部に至るまで、まじまじと観察するなんて、めったにすることではない。真似ようにも手足が自

由にならない。だから、簡単なようだが、上手にやるにはコツがある。建築のプロであるJIA会員が素人に負けてはいられない。そこで、けんちく体操の指導で世界中を駆け回っているチームけんちく体操にご指導をお願いしたところ快くお引き受け頂いた。興味のある方はどなたでもご参加下さい。

講師: 田中章子氏、大西正紀氏 米田勇氏、高橋英久氏



写真: 田中 元子

写真: 田中 元子

3.11 とグローバルデザイン

BankART Studio NYK

12月1日(土)13:00~16:40

グローバル(地球化)とローカル(地域化)の意味を合わせ持つグローバルデザインは、災害復興のみならず今後の都市と建築を考える上で重要なキーワードです。UIA2011東京大会でのシンポジウムではその意味を深めることができ、その内容をまとめた新著「3.11とグローバルデザイン」が出版されました。今回、その執筆に加え、テーマに相応しい建築家をパネラーに迎えディス

カッションします。各建築家の作品を通してグローバルデザインとは何かを浮き彫りにすると共に、「地域を追求すると世界に繋がる」ことを軸に、創造的でポジティブな視点を共有できればと思います。



COLONNADE

COLONNADE